

近世政米文
家史
不
言
之

昭和廿七年十月二十八日 初版



監修 福集 發行所

印刷所

近代歐米文学史概説

定価二八〇円

中島健蔵
安土正夫

日本出版協同株式会社

代表者 福林正之

東京都文京区春日町一ノ一

電話小石川(四二八六)七八番

振替・東京 一九六三 一三番

鎌倉印刷株式会社

落丁本・額丁本はお取替いたします

Printed in Japan

序 言

ヨーロッパの近代とは、古代・中世にたいし、ルネサンス以降をよぶ場合があるが、狭い意味の近代は一七八九年のフランス革命に始まるといえるであろう。この革命は単にフランス一国の特殊な問題ではなく、ヨーロッパ全体の問題であり、延いては、ヘーゲル（一七七〇—一八三一）が正しく道破したように、人類全体の問題であつた。その時までのフランスは世俗界の専制君主たる王が精神界の専制君主たるローマ法王と結び、王室の藩屏たる上層僧侶と貴族を従えて爾余の人民全部を絶対的に支配していた。「国家とは朕なり」というルイ十四世（在位一六四三—一七一五）の有名な言葉ほど専制君主制度の本質を示しているものはない。それは、王権は神から授けられたものであり、王は國家の一切の法律を超越する神聖不可侵な存在であり、國家は王の私有財産であるという意味である。

イギリスではさういふ封建時代の因襲的な妄想との抗争が既に十三世紀から始まり、十六世紀末には下院議員が、即ち町民階級出身の議員が國政に参与し、十七世紀中葉には一度は共和國を建てたくらい、人民主権の精神が牢固として根を張つていたのであるが、十七世紀のフランスはそれとは全く反対に専制君主制度が比類なく鞏固になつた。フランスの十八世紀は封建制度から資本主義制度への過渡期であるが、王は貴族階級とブルジョワジーの相拮抗する勢力關係の上に専制政治を施していた。ところが前代の末から始まつた王室と特権階級の經濟的破綻とブルジョワジーの力強い擡頭とによつてこの均衡が破れ始めると、当然王権の權威が揺らぎだした。そして王権の動搖は一方に王権にたいする理論的批判を生ぜしめた。その役割をもつとも力強く果したものは、十七世紀イギリスの政治的自由

精神に刺戟された啓蒙哲学である。批判はまず宗教的權威にたいして向けられたが、続いて宗教的權威と同様に曖昧な、むしろそれ以上に曖昧な君主の權威にたいして批判が向けられたのは当然である。

フランスの十八世紀精神の主要な特徴は理性による自由な検討である。百科全書派^{アンシクロペディスト}とよばれた啓蒙哲

学者たち、ヴォルテール Voltaire (一六九四—一七七八)、ルソー Rousseau (一七一二—一七八)、ディドロ

Diderot (一七一三—一八四八)らは博大な精神をもつて、宗教、哲学、社会、政治など、精神的方面も物質的方面も凡そ人間にとつて重要な一切の事を論議の対象にした。このように万事が理性の検討に附

されたことは未曾有の事であつた。彼らの論議は純粹に思辯的で行爲を目的としてはいなかつたが、当時の社会状態の一切を憎惡し、輕蔑し。一切を根柢から革新しなければならぬという熱望を人民の

胸中に深く植えつけた。こうして、ブルジョワジーが特権階級の専横にたいして私有財産を守らなければならぬという要求と、この偉大な人間精神の覺醒とが合体して八九年の革命を齎したのである。

この革命はブルジョワジーの利益のための革命であつたからブルジョワ民主主義革命とよばれ、一七七六年に独立したアメリカのデモクラシーと共に、近代民主主義の二つの源泉と言うことができる。

なお平等主義という革命の一つの標語は私有財産そのものに對する批判を喚び起し、一七九五年のバブーフの企図のような共產主義的運動も行われ、一八四八年の二月革命、一八七一年のパリ・コミュー

ーヌの蜂起のようなプロレタリア革命の萌芽を既にはらんでおり、一九一七年十月のロシア社会主義革命の遠い源泉でもある。八九年の革命の重要性は、このように近代社会の重大な諸問題を提出し

たことにあるが、なおもう一つ注目すべきことは、これが純粹な思想の勝利であつたということである。「こいつらは何にでも理屈をつけたがるが、そのくせ千エキュの年収もないのだ」とカストリー

公爵から傲然と見下されたダランベール d'Alembert (一七一七—一七八三) やルソーの思想が、公爵

はおろか王までも含めた特権階級全体を転覆させたということである。理論と実際とは違うという俗説を打破し、正しい理論は現実そのものであり、たとえ人為的な妨碍を蒙つても結局はその理論は事実と化するということをこれほど見事に示した模範はない。これこそフランス革命の今なお生々とした偉大な教訓である。しかも、十八世紀後半のヨーロッパ諸国の空気はこのような革新を断行するのに必ずしも好都合ではなく、プロイセンのフリードリヒ大王の示した輝かしい模範はオーストリア、デンマーク、スウェーデンにおいて君主専制の強化を促していたことを考えると、フランス国民の努力は極めて高く評価されなければならない。かくてフランス革命は近代精神、即ち理性による自由検討の精神の基を開き、近代社会と近代文化の淵源となつた。これが、我々が近代ヨーロッパ文学をフランス革命から説き起すことにした理由である。

ヨーロッパ文学という觀念の發生はヨーロッパでもそう古いことではない。ようやく十八世紀後半以後のことである。ドイツではゲーテ（一七四九—一八三二）がヨーロッパ精神というものを考え始めたが、フランスでは革命によつて国外に追放された亡命貴族たちの間に國際的な思想が初めて生れたのである。それ以前の古典主義時代のフランスは自国の文学を絶対視して、逆にヨーロッパ諸国をフランス文化の下に隷従させようとする傾きが強かつたし、實際ヨーロッパの新興國家の元首たち、フリードリヒやロシアのピョートルはフランス語を宮廷用語にしていたくらい文化的にフランスに屈従していたのである。それがロマン主義時代になると、むしろ英・独の天才を自国の古典的大作家よりも高く評価するようになったくらいで、この時に初めてフランスはヨーロッパ的な知的團體の一員として、各国と協力して伸びてゆこうとする傾向を持つていたつた。共和思想を新しい福音のようにヨーロッパ諸國に宣べ伝えた革命フランスは、ヨーロッパの文学の發見をヨーロッパ諸國に負うたので

ある。ナポレオンの外征はフランスの国にとつて必要なことではなかつたと言われているが、彼の征服慾は必ずしも神聖ローマ帝国の新版というだけではなく、もつと近代的な意味、即ち彼の觀念に型取つてヨーロッパを造り直したいという要求がそこに含まれていたとも考えられるであらう。ワイマールで会見したゲーテとナポレオンの頭の中に同時に明瞭に浮んだ問題は、確かにヨーロッパ的世界であつたに相違ない。彼らの時代においては、世界像はまだヨーロッパだけに止まつていた。ヨーロッパの地理的距離が交通機關の極度に發達した今日とは比較にならぬくらい大きかつたからである。モスコから退却の際ナポレオンは当時として考へ得る限りの交通機關を利用して、ポーランドのヴァルナからパリ附近まで約千四百マイルを走破するのに三百十二時間を要したというが、それは今日の鐵道を利用すれば、普通列車でも四十八時間以下の旅にすぎないし、飛行機を利用すればまた遙に短縮できるわけである。

現代ではもはやヨーロッパは世界ではない、世界の一地方にすぎなくなつたし、その地方的重要性も嘗てのように絶対的ではなく、大西洋の彼方の大陸とアジアを含む東歐に重点が移つてきた。それ故、現代はもはや単にヨーロッパ文学のみを問題にする時代ではなく、世界文学が問題である。我々は本書において英、米、独、仏、露の文学だけを語ることにしたが、それは少くともそれらの国の文学が近代文学の主流であつたからにすぎない。我々は常に世界文学的視野を失つてはならない。ここに省かれた南欧、北欧の文学、それから現代中国の文学も大切である。

我々は極東の島国にあつて、ヨーロッパの利害問題からは隔絶し、強大なアメリカとは太平洋を間に遠く隔たり、偉大な潜勢力を持ちながら自国の建設に没頭していたロシアからは圧力を受けず、前近代的な文化の段階にとり残されていた隣邦中国はかえつてわが国の圧力におされていた—そういう

過去の日本は確かに世界の中で言わば孤立していた。この孤立感是一部の者に神から選ばれた国という妄想を抱かしめたが、確かにこの孤立感のために理性ある人々にも世界的視野が欠けていた。しかし今日は全く違ふ。我々は日本を世界の極めて小さな一地方として意識している。これは敗戦から与えられた偉大な教訓の一つである。ヨーロッパ、或はアジアの一小部分における事件、例えばエジプトやアフリカの騒擾、インドネシアや朝鮮の動乱が世界的にどんなに重要な意味を有するかを眼前に見ている我々は、日本もまたそういう国際関係の中に緊密に編入されていることを痛切に感ぜずにはいられない。

日本の過去の政治的孤立は文学上にも当てはまる。日本文学についてヨーロッパの影響を考え得るのはやつと明治末期のことにすぎないが、今日までのところ外国文学の紹介は非常に盛んであるが、それから受ける影響というと極めて微弱であつた。文学のみと言わず、今までの日本の精神界は一度もヨーロッパの影響を深刻に受けたこともなければ、その反作用としてヨーロッパになんらかの動力を与えたこともない。

一国の文学は、ドイツやロシアの文学のように、またとくにイギリス、フランスの文学のように完全に発達し、偉大な伝統を背負い、遠い未来に伸びる可能性を現在においてはらむものであれば、その国民の思想、感情の一切の歴史のみならず、その将来をも何ものよりもよく示すものである。故に外国文学の研究は、外国人の性情を知るのに此の上ない手段である。しかし利益はそれのみに止まらない。外国文学の研究は我々をその中に言わば同化せしめる作用を持つと共に、また我々の文学を外国文学の立場に立つて概観し得るようにさせる作用を持つ。即ち、ブランドスが言つたように、外国文学の研究は、一端で物を拡大して見せ、他端で物を縮小して見せる一種の眼鏡のようなものであ

る。

近年ヨーロッパ諸国、とくにフランスにおいて比較文学という研究方法が盛んになつてゐる。主として近代ヨーロッパ諸文学における様々の比較研究であるが、我が国でもこれに関心を持つ学者が既に現われている。この新しい学問は世界文学的視野を我々の身につけるための手段として重要であるが、その基礎として、各国文学史の知識を必要とし、かつ、この方法の優れた先驅者たるデンマークのゲオルク・ブランドス (Georg Brandes (一八四二—一九二七)) のように、世界文学を未来に向う運動として把握することが大切であらう。

我々日本人は人類という意識に欠けていた民族である。ヨーロッパにおいて人類という意識を最初に植へつけたものはキリスト教であるが、凡そ宗教的な民族ではない我々の精神にキリスト教はなんら本質的な影響を及ぼさなかつた。我々に初めて痛切に人類を思ふ心を与えたものは原子爆弾の洗礼である。この洗礼によつて初めて我々は人類史の中に劃期的な足跡を印し、人類全体の運命の中に身を置いたのである。その事はまた我々が世界文学の大いなる流れの中にはいつたことを意味する。

目次

序言

第一篇 フランスの近代文学

第一章 一七八九年の革命と文学革命の要求

亡命文学、シャトーブリアン、スタール夫人、シャトーブリアンとスタール夫人のロマン主義、アンドレ・シュニエ

二

第二章 王政復興時代とロマン主義文学の開花

ラマルチーヌ、ヴィニール、ユゴー、ミュッセ、ロマン主義運動とその理論

一〇

第三章 寫実主義の偉大な先駆者

スタンダール、バルザック

二

第四章 知性の時代と批評精神

サントーブ、テーヌ、ルナン

二六

第五章 知性の文学

高踏派詩人、寫実主義と自然主義、フロベール、ゴンクール兄弟、ゾラ、メダンのグルー

三〇

第六章 第一次大戦前

左右の対立—ドレフュス事件、フランスとロラン、アクション・フランセーズ、ベルグソン、

三九

ペギ、カトリシズム、流派の崩壊—象徵主義、ロチ、舞台への一瞥、新文学の萌芽、一体主義

第七章 両大戦の間……………五〇

一九二〇年代—戦争と文学、ジード、ヴァレリー、ブルースト、知的ヒューマニズム、超現実主義、脱出文学、カトリック作家、民主主義文学の萌芽、前衛劇の全盛、一九三〇年代—反ファシズム運動、「コムミュヌ」と「ヨーロッパ」、不安の文学、ポピュリズム

第八章 第二次大戦後……………六六

抵抗期—レジスタンス、協力作家、「フランス文学」と「深夜叢書」、短篇と詩、演劇、殉難作家、解放後—戦後文学、実存主義、民主主義文学、劇壇の動き—

第二篇 イギリスの近代文学

第一章 フランス革命までの英文学……………八〇

文芸復興とエリザベス朝、王政復古期の文学

第二章 フランス革命期の英文学……………八三

思想と言論—バーク、詩—ワーズワース、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツ、ランダー、小説—スコット、オースティン、評論雑誌、隨筆—ハズリット、ラム

第三章 ヴィクトリア朝……………一〇一

思想界、批評—カーライル、ラスキン、アーノルド、ペイター、小説—ディケンズ、サッカレー、ガスケル夫人、ジョージ・エリオット、ブロンテ姉妹、メレディス、ハーディ、詩—テニソン、ブラウニング、P・R・B運動

第四章 世紀末及び二十世紀

..... 三二

一般思潮、世紀末文学、小説 ジェイムズ、ウエルズ、ベネット、ゴールズワージー、モーム、ジョイス、ロレンス、劇—ショー、バリー、アイルランド文芸復興—イエーツ、シング、詩—ブリッジズ、ハウスマン、ド・ラ・メア、メイスフィールド、エリオット—

第三篇 ドイツの近代文学

第一章 ドイツ文学の特質

..... 二二

ゲルマンの性格、ドイツ文学の二元性、ドイツ文学の発展段階

第二章 啓蒙主義からシュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤時代）へ

..... 二六

啓蒙主義の影響、ゴットシエット、ダイーラント、レッシング、敬虔主義、シュトゥルム・ウント・ドラング、ハーマン、ヘルダー

第三章 古典主義文学

..... 二六

ドイツ古典主義（古典的ヒューマニズム）—ヴィンケルマン、フンボルト、古典主義までのゲーテとシラー—イタリア旅行に至るまでのゲーテ、イエーナ移住までのシラー、古典主義期のゲーテとシラー—イタリア旅行からシラーの死までのゲーテ、イエーナおよびヴァイマル時代のシラー、シラー死後のゲーテ—

第四章 ロマン主義文学

..... 二八

前期ロマン主義、後期ロマン主義、ヘルダーリン、ジャン・パウル、シュレーゲル兄弟、ノヴァーリス、ティーク、クライスト、ロマン主義の作家達、ホフマン、アイヒェンドルフ、レーナウ

次 第五 章 寫實主義文學

九三

目

若きドイツ、ハイネ、フライリヒラート、ヘルヴェーク、ビュヒナー、メーリケ、ドロステ
|| ヒュルスホフ、ケラー、マイアー、シュティフター、ルートヴィヒ、シュトルム、グリル
バルツァー、ヘッベル、フォンターネ

第六 章 現代文學

一〇一

ハウプトマン、リーリエンクロン、デーメル、ホーフマンスタール、リルケ、シュビッテ
ラー、ゲオルゲ、シュニッツラー、ヴェデキント、トーマス・マン、ヴァッサーマン、ヘッ
セカロツサ

第四 篇 ロシアの近代文學

第一 章 ロシア近代文學の背景

一一〇

十八世紀後半のロシア社会——ロシアの封建農奴制社会、エカチェリーナ二世の治世、プ
ガチョフの叛乱、フランス革命とロシア

第二 章 自由思想の最初の芽生え

一二五

ラジシチェフ、ノヴィコフ、デカブリストの乱

第三 章 リアリズム以前の文學

一二三

ロモノソフ、スマローコフ、デルジャーヴィン、カラムズィン、ジュコフスキー、コリツ
オフ

第四 章 リアリズムの確立

一二七

フォンヴィーズィン、グリボエードフ、クルイロフ、プーシキン、レールモントフ、ゴーゴ

第五章	一八三〇—五〇年代の思潮	二二五
-----	--------------	-----

ゲルツェン、ベリンスキー

第六章	大改革前後の文学	二四四
-----	----------	-----

チエルヌイシエフスキー、ドブロリユーボフ、ネクラソフ、農奴制の廃止、トウルゲーネフ、ゴンチャロフ、ドストエフスキー、サルトルイコフシチエドリソ、オストロフスキー、トルストイ、其他の作家

第七章	夜明け前の文学	二五八
-----	---------	-----

チエーホフ、コロレンコ、ゴリリキー

第八章	社会主義リアリズム文学	二六三
-----	-------------	-----

ソヴェート文学第一期、ソヴェート文学第二期、第三期戦争文学、第四期の文学、ソヴェート文学の理念

第五篇 アメリカの近代文学

第一章	黎明期よりロマン主義時代へ	二七〇
-----	---------------	-----

ロマン主義文学の開花—植民地的劣等感の克服、アメリカ・ロマンチズムの開花、国民文学の発生—重大な危機、フランス革命の影響、国民文学の胎動、初期アメリカ文学—アーヴィング、クーパー、ブライアント、ボウ、ニューイングランドの文学—トランセンデンタリズム、エマースン、ソーロー、ホーソン、奴隷解放の文学とハーヴァード・グループ、ロングフェロー、ハウムズ、ロウエル、アメリカ文学の独立—メルヴィル、ホ

第二章 現實主義時代の文学

南北戦争後より世紀末—西部の発展、新旧アメリカの交替、Gilded Age の作家達—
 鍍金時代、マーク・トウェン、エミリ・ディキンソン、アダムズ、ブレット・ハート、ワーキン・
 ミラー、リアリズムの勃興—ハウエルズ、ガーランド、ジェームズ、イーディス・ウォー
 トン、自然主義の文学—ピアス、クレーン、ノリス、ドライザー、シンクレア、大戦以後
 の文学

後記
索引

(終)

第一篇 フランスの近代文学

第一章 一七八九年の革命と文学革命の要求

フランスの専制君主制度は十七世紀に太陽王とよばれたルイ十四世の治世とともに隆盛の極致に達したが、十八世紀には貴族階級の衰退が始まり、勃興し始めたブルジョワジー（町民階級）の鋭気はしだいに王権の根柢を揺がし始めた。この新しい社会的・経済的勢力は、十八世紀の啓蒙精神に支持、激励されて、しだいに政治面に進出し、ついに一七八九年の革命を爆發させて、旧い絶対身分王政に止めを刺した。大革命の前夜、その理論的指導者の一人シエイエス Sieyès（一七四八—一八三六）は有名な『第三階級とは何ぞや』と題するパンフレットにおいて、二十万の特権階級（上層僧侶と貴族）に抑圧されている二千五百万の第三階級（町民と農民）の鬱勃たる民主主義の要求を代辯して、フランス国民のほとんど全体をなす第三階級の政治的地位が今日まで零であつたことの甚だしい不当を難じ、僧族、貴族の特権階級に拮抗する階級となることを要求した。革命によつて一挙に大勝利を得たブルジョワジーは、シエイエスのいわゆる「一廉の者になること」のみに甘んぜず、さらに特権階級を抹殺して、「零」から一切になることを欲し、それを企てた。この企ては、一八〇四年のナポレオン帝国の成立とともに潰えさつたかのごとく見えた。たしかに帝政は武断的、警察的専制政治ではあつたが、本質的には八九年の革命の延長線上にあつたといえる。もはや絶対身分制度はなかつた。いかなる身分の人間も才能と精力によつて榮達し得ることは、他ならぬ皇帝ナポレオン自らが最も明かに範を示していた。すべての兵士は將軍たることを、すべての小吏は大臣たることを、十分の可能性

をもつて夢見ることができた。なおまた、この軍事的天才はかつての無力な第三階級出身者の鋭氣にみちた兵団を率いて正統君主を戴くヨーロッパ諸国の軍をことごとく撃破し、圧倒することによつて、第三階級に偉大な力の自信をあたえた。

ブルジョワジーはすでに政治的、社会的革命を成就した。今や第三の分野、文学における革命を成就しなければならない。文学における趣味判断の主宰者であつた貴族階級は国外に亡命してサロンは閉鎖され、古典的伝統の維持者であつたフランス翰林院^{アカデミー}は廃止され、今やあらゆる才能に向つて文学の門戸は自由に解放された。文学における革命精神は過去の伝統的文学を断罪して言つた、「概して我々は過去においてフランス語で書かれた小説で尊重すべきものをほとんど持たなかつた……作家はただ貴族階級のためにのみ仕事をした。さればこそ情熱の描写よりも、滑稽味へ貴族趣味から見ての）の描写が行われ、大画面よりも細密画が行われたのである。真実は万人に属するものであるから万人が認め、感ずる特徴であるが、それがそこにはほとんど見出されなかつたのだ。」この言葉の裏面には文学革命のまさにあるべき姿が明瞭に看取される。すなわち、貴族的な十七世紀文学の古典趣味、十八世紀文学の擬古典趣味の桎梏から人間の自然性を、人間の情熱と真実を解放すること。すでに十八世紀後半から、レティフ・ド・ラ・ブルトヌ *Resit de la Bretonne* (一七三四—一八〇六) の小説、セバスチャン・メルシエ *Sébastien Mercier* (一七四〇—一八一四) の劇と理論は民衆的文学を創造、もしくは暗示していた。革命は当然この種の文学の進出に廣大な前途を開いた。しかし、途は開かれたが、新しい民衆的文学を創造する天才は未だ現われなかつた。雄大な国民的叙事詩の材料は周囲にあふれていたが、浅薄な革命的文学は現われても、文学の主流は依然として前世紀の擬古典主義を墨守していた。それは新しい作家を産むべき新しい文学的風土が未だできあがつていなかつたから